

新学長に

法学部の角田邦重教授

鈴木康司学長の任期満了に伴う学長選は10月13日行われ、角田邦重（すみだ・くにしげ）法学部教授（61）を選出した。任期は11月6日から3年間。



実学の中央、活発な議論を

これでも高校生のとき、群像の新人賞候補にノミネイトされたことのある先生から、「卒業したら一緒に同人雑誌を出さないか」などど誘われて、その気になりかけたことがある。もちろん今では、やらなくて良かったと思っている。東京の大学に行きたいという切実な思いは、事務所を手伝いながら大学に通う意志のある者を求めている郷里（佐賀県）出身の弁護士との出会いで実現することになった。それなら中央大学の法学部が良いのではないかということになって、私の文学青年から法律家志望への転身は、実にあっさりど決まってしまった。それでも暫くは、法学部の授業はそっちのけにして、高橋健二、田辺貞之助、吉田精一郎といった綺羅星のような名物教授、それに若き日の哲学者・木田元といった文学部の人達

の講義にせっせと通ったものだ。

今になってみると、自分のことがまるで中央大学法学部の申し子みたいなものだと思われてならない。1964（昭和39）年、4年在学中に司法試験に合格したとき、500名あまりの合格者中、中大出身者は170名を超えていた。私もそうであるが、夜間部出身の人達がかなりの部分を占めていたはずだ。後に沢山の法曹界関係者から、中大法学部で学ぶことで実務法曹への転身を勝ち取っただけでなく、それまでの職業経験がどんなに役立っているかを聞かされ、「実学の中央」という伝統は単なる学風ではなく、現実的基盤をもっていることを痛感させられた。

自己を振りかえって、実務法曹特有の精神構造のもつ強みと弱点といったものを感じることがある。それは夢を語るよりも、まず地に足が着いているかどうかを考える職業的性癖といったものだ。錯綜した複雑な事実の連鎖から、一定の意味ある事実を抽出し（要件事実）どんな権利の存在を構成できるかを考えるという実務法曹の役割から来るものだと言ってよい。反面で、実務法曹には夢を語るのとはかならずしも得意なことではない。しかし、これから5年、10年先に日本の大学、もちろん中央大学がどうなっているか、そのイメージを示すのが大事なことは誰でも分かっている。法曹に最もふさわしいのは、原告・被告の対話を通して真実を発見する裁判の対審構造に習って、ブレーン・ストーミングの精神にもとづく活発な議論を生み出すことではないかと思う。